5 大韓帝国期光州における奥村兄妹の真宗布教・実業学校設立

―新史料『明治三十一年　韓国布教日記』を中心に―

山本　浄邦

1. 問題の所在

奥村円心（1843-1913）は日本最大級の仏教宗派の一つである真宗大谷派（本山は京都・東本願寺）の僧侶で、1877年近代日本仏教初の朝鮮布教を開始し、釜山（プサン）のほか元山（ウォンサン）でも布教した。その後、帰国した円心は外相・大隈重信や貴族院議長・近衛篤麿らの支援を取りつけて1897年に再び朝鮮に渡り、全羅南道（チョルラナムド）の光州（クァンジュ）で布教活動を開始した。妹の五百子[1]（1845-1907）はその光州に実業学校を設立すべく少し遅れて現地に入り、初代校長となった。

当時の朝鮮半島では、すでに日本仏教各派が布教を行っていたが、そのほとんどは日本人居留地のある開港地やソウルを中心としたものであった。また、朝鮮王朝は1897年に国号を大韓帝国（韓国）とあらため、皇帝に権力を集中して近代化をすすめようとしていた。そのような時期にあって、奥村兄妹の光州での活動は、内陸部に拠点を設置し社会事業をおこなったという点において日本の他宗派と比較して突出したものであったといえよう。また、この事業が政界の後押しのもと外務省からの資金によっておこなわれていたということは、近代日本における国家と宗教との関係を考えるうえで注目すべき事例であることを示唆している。

---

[1] 五百子は朝鮮からの帰国後、中国でも視察などの活動をおこない、義和団事件の経験から愛国婦人会を設立した人物である。

以上のような意義をふまえ、本稿ではこの奥村兄妹による光州での活動について論じる。

奥村兄妹の光州での活動について言及した主な先行研究には、彼らの活動を日本による朝鮮侵略の「宗教的尖兵」として描いた任展慧（イムジョネ）・美藤遼・橋澤裕子による先駆的研究[2]をはじめ、日本人による朝鮮における教育活動の先駆けとして実業学校の活動をえがく稲葉継雄の研究[3]、最近では実業学校を近代日本仏教による朝鮮での初期社会事業として位置づける尹晸郁（ユンジョンウク）と諸点淑（ジェジョムスク）の研究[4]がある。

先行研究の問題点は、おおまかにいうと次の4点をあげることができる。

まず第一に、これまで利用されてきた一次資料が限定的であったため、多くを伝記など二次資料に依拠している、という問題である。とくに伝記は顕彰の色彩が強くでているもので、物語を盛り上げるために脚色されていることもあるだろう。さらに、場合によっては限られた一次資料と伝記の記述とのあいだで強引に辻褄合わせがなされ、その結果、歪曲された「史実」を構築してしまう可能性もある。あらためて先行研究によって採用された「史実」を再検討しなければならないだろう。

第二に、日本国家との関係について指摘してその「尖兵」としての性格を批判しつつも、国家との具体的な関わりのあり方やどのような政治勢力と結びついていたのかについてはほとんど考察されていない点である。これは、奥村兄妹の活動の政治的性格や真宗大谷派の大陸布教の政治性を考

---

2 任展慧「朝鮮統治と日本の女たち」、もろさわようこ編『ドキュメント女の百年5　女と権力』平凡社、1978年。美藤遼「明治仏教の朝鮮布教」、『季刊　三千里』15、1978年。橋澤裕子「日本仏教の朝鮮布教をめぐる一考察」、橋澤裕子『朝鮮女性運動と日本　橋澤裕子遺稿集』新幹社、1989年。

3 稲葉継雄『旧韓国～朝鮮の日本人教員』九州大学出版会、2001年。

4 尹晸郁『植民地朝鮮における社会事業政策』大阪経済法科大学出版部、1996年。諸点淑「東アジア植民地における日本宗教の「近代」：植民地朝鮮における日本仏教の社会事業を事例として」2007年度博士論文（立命館大学大学院文学研究科史学専攻）。

える上で避けて通れない問題であろう。

第三には、朝鮮人による記録が全く史料として用いられていない点である。日本側の記録とともに、朝鮮人自身の記録によりながら朝鮮にとって奥村兄妹の活動とは何だったのかを明らかにする必要があろう。

第四に、仏教史以外の研究者においては真宗の教義・教団についての理解があやふやであることは否めず、一方、仏教史の研究者においては朝鮮や日本における当時の政治や社会の状況といった仏教史以外の視角が欠如していることが多い点である。朝鮮史、仏教史、日本政治史さらには真宗学的見地など多角的に奥村兄妹の活動を考察することでその全貌を明らかにする必要があるだろう。

以上のような問題点をふまえ、次章では①光州布教・実業学校構想の背景、②円心による真宗布教と朝鮮人の反応、③光州実業学校の設立と運営、の3つのテーマを設定し、順を追って考察をすすめることとする。加えて3章では、④失敗の理由に関する通説の再検討、もおこなう。

史料としては特に、1898年の円心の布教日記『明治三十一年　韓国布教日記』（以下、『韓国布教日記』）という新史料を用い、これを中心として考察する。

この『韓国布教日記』は円心の朝鮮布教に関する基本史料として利用されてきた1877～97年の記録『朝鮮国布教日誌』の単なる続編ではなく、本山の東本願寺に提出した書状や金銭の請求書などより詳細な記録がなされており、通訳の岩下徳蔵が記したものである。先行研究で多く利用されている大谷派朝鮮開教監督部編『朝鮮開教五十年誌』（1925年、以下『五十年誌』）の記述の一部はこの史料によっているが、それ以降、その存在が忘れられ、戦後の研究ではもっぱら『五十年誌』が史料として引用されてきた。『韓国布教日記』は円心たちの光州における活動を考察するにあたって、欠くことのできない基本史料であるといえるだろう。ただし、史料の損傷がはげしく、虫食いや水分によるにじみが随所にみられるため、読解が困難な

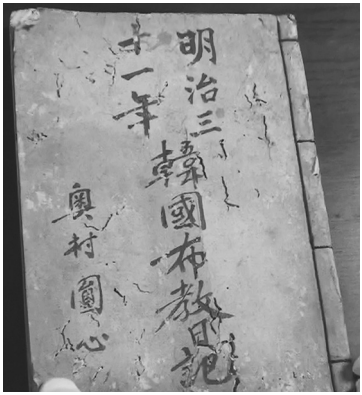

図1　『明治三十一年　韓国布教日記』（高徳寺蔵）

部分があることを最初にことわっておく。

また、朝鮮人による史料として、円心のもとを訪れた朝鮮人たちが書き残したノート『金蘭集』も用いる。『金蘭集』は円心の布教に対する朝鮮人自身による反応の記録であり、円心が具体的にどのような内容の布教をしていたのか、その一端をうかがい知ることができる新史料である。

これらはいずれも、奥村兄妹の出身寺院である佐賀県唐津市の高徳寺に所蔵されていて、2010年12月に筆者が高徳寺でおこなった調査でその存在を確認したものである。

このほか、外交史料を中心とした日韓の公文書を用いるとともに、前述『朝鮮国布教日誌』、仏教新聞『中外日報』『明教新誌』のほか『近衛篤麿日記』などを利用する。

これにより、本稿は、従来ほとんど検討されてこなかった1897〜99年にかけておこなわれた奥村兄妹による光州での活動をめぐる日本政治史、朝鮮史などの範疇に属する領域について若干の考察を加えるとともに、新史料を活用しつつその実態を把握し、先行研究によって通説とされている事柄に対して再検討を試みようとするものである。

2. 奥村兄弟による光州布教・実業学校設立

2-1. 構想の背景

1877年から朝鮮での布教に従事していた円心は1882年に壬午軍乱が発生したことをきっかけに、日本に帰国することとなった。そして、朝鮮で布教活動を再開することができないまま、10年以上の年月が過ぎていた。その事情について、円心が光州で活動していた当時に発行された『中外日報』1898年4月29日号の記事は次のように伝えている。

> 奥村円心氏は［中略］明治十五〔1882〕年に於ける内地暴徒の乱ありて已むを得ず帰国してより一時中絶の姿に帰せしが、当時彼の亡命の韓客金玉均朴永（ママ）孝等を誘ひて我邦に来遊寄食せしめたるは全く奥村氏等の斡旋に因るものなりと云ふ、爾来再び渡韓せん筈なりしも恰も本山の財政之を許さず遺憾なから等閑に打過ぎたる［以下、略］

すなわち、円心は妹の五百子らとともに亡命開化派たちの世話をしながら朝鮮での活動再開を企図していたが、大谷派の財政状況によって実現が困難になっていたのである。

実際、当時の大谷派の財政状況は極めて厳しい状態に陥っていた。その大きな要因は円心が朝鮮で活動していた1879年5月、幕末に全焼していた東本願寺の本堂および浄土真宗の開祖である親鸞（1173-1262）の木像を安置する御影堂の再建についての「御消息」が法主によって発示されたことに始まる。以降、両堂再建に伴う負債が大谷派の財政を圧迫するようになっていった。そして円心帰国後の1885年ごろには最悪の状況に陥っていた。

このような厳しい状況は1895年まで継続した。この年になって両堂が落慶し、関連負債もほぼ償却したのである。そして、1896年には大谷派で教学資金積立法が定められ、門徒からの募金により教学振興と布教の資金に

充てられることになった。だが、これを負債償却後に新たに生じた負債30万円あまりの処分に充てようとする当局の意図が明るみになり、清沢満之（まんし）らによる寺務改革運動が始められるにいたった[5]。

このような財政状況であったので、円心は朝鮮での布教再開のための資金を大谷派教団に期待することが困難であったのである。そのため、日清戦争終結という新たな局面において朝鮮での活動を再開しようと画策する兄妹は、その資金を国家に期待するようになった。

そこで兄妹が頼ったのがその血縁であった。兄妹の父・了寛は有力な公家の二条家から高徳寺に入寺した人物で、了寛の祖父は左大臣・二条治孝である。支援者を求めて五百子は二条家の当主・二条基弘（公爵・貴族院議員）を通じて、政界に対してはたらきかけをはじめた。

また、五百子は旧唐津藩小笠原家の小笠原長生（ながなり）（子爵・海軍）とも親交を深めていた。

近衛篤麿は1897年1月5日の日記に「唐津の女豪奥村五百子、二条公を介して自影を贈る」[6]と記している。近衛篤麿と二条基弘はどちらも「五摂家」に属する有力貴族の当主で、貴族院内では対外硬派の三曜会（領袖は近衛）に属し、その指導的立場にいた。五百子はこの両者のつながりを利用して近衛に接近したのである。

その後、同年6月21日には五百子は直接、円心とともに近衛に会いに行っている。その日の近衛の日記によると、その用件は「円心布教の為朝鮮に出張可致に付其為海外布教に尽力有之度旨本願寺法主に勧誘ありたしとの事」で、これに対し、近衛は「承知」したとしている。そして、翌日の日記に大谷光演・東本願寺新法主に「朝鮮布教の事」と「奥村円心の事」に

---

5 柏原祐泉『近代大谷派の教団：明治以降の宗政史』真宗大谷派宗務所出版部、1986年、pp.42-54。

6『近衛篤麿日記』第1巻、近衛篤麿日記刊行会、1968年、p.136。

ついての書状を送ったという記録がある[7]。これが功を奏したようで、7月8日の近衛の日記には円心から「過日法主に添書したる謝辞」と「弥近々朝鮮渡航の趣通知」を内容とする書状が届いたと記されている[8]。

また、6月21日の『朝鮮国布教日誌』の記述によれば、奥村兄妹の訪問を受けた近衛は朝鮮布教の考えに賛同しつつ、「地図ヲ示シテ、釜山港、木浦（モッポ）辺ニ出張スヘシト指揮」したという[9]。近衛がこの計画にかなり乗り気であったことがうかがえる。

以上のように、奥村兄妹は二条基弘を通じてつながりをつくった近衛篤麿に、朝鮮布教を東本願寺にはたらきかけるようにもちかけ、大谷光演に円心の「朝鮮出張」を命じさせるのに成功したのである。

だが、これによって出張の費用程度は大谷派から出された[10]としても、本格的に新たな地で布教を行い、学校を建設する資金の問題はどのようにして解決したのであろうか。

この頃、政党の力が伸長し、進歩党の大隈重信が第2次松方正義内閣に外務大臣兼農商務大臣として入閣していた。円心の『朝鮮国布教日誌』には、朝鮮布教再開をめぐって大隈と交渉したという記録が確認でき、大隈の支援のもと、奥村兄妹の光州での活動が実現したことは先行研究でも簡単に言及されている。しかし、大隈と兄妹とのそもそものつながりや大隈がなぜ支援者となり得たのかについては明らかにされていない。

坂野潤治の研究など、これまでの貴族院研究では、貴族院は「藩閥政府

---

7 『近衛篤麿日記』第1巻、近衛篤麿日記刊行会、1968年、p.236。

8 同上、p.245。

9 奥村円心「朝鮮国布教日誌」、柏原祐泉編『真宗史料集成第11巻　維新期の真宗』同朋舎、1975年、pp.494-495。

10 一方で、大谷派など宗教団体からの公式的な派遣でなく個人の活動として海外で宗教活動を行なうことは現地政府や現地の日本公館の対応が厳しくなり、困難となりやすいので、円心にとっては必ずクリアすべき問題であった。

の忠実な「藩屏」としての役割を果たしていた」[11]とされてきた。だが近年、小林和幸[12]や内藤一成[13]の研究によって、必ずしもそうとは言えないことが明らかになった。とくに、兄妹が光州での活動を始める1897年ごろまでは貴族院において三曜会とその同盟者である懇話会の勢力が他会派より若干優位にあり、彼らは藩閥政府に対し一貫して批判的な態度をとってきたのである[14]。

一方で、1893年末以降、三曜会は衆議院の改進党（のちの進歩党）などと協調関係を形成するようになる。その背景としては、自由党が当時の伊藤博文内閣に接近したことで自由党と改進党の民党連合が崩壊し、衆議院における政治状況が大きく変化したことがあった。さらに、政界の争点が「条約改正・対外硬」問題へと移ったことにより、これまでの「民力休養」問題などにおいて国家優先の立場から民党の主張と対立していた近衛、二条ら貴族院の「硬派」が、政府や自由党に対抗する改進党など衆議院のいわゆる「硬六派」[15]と協調関係を形成するようになったのである。

このような貴族院と衆議院の両勢力の緩やかな協調関係は日清戦争後にいたっても継続していた。1896年9月に第2次松方内閣が成立すると近衛は、文相として入閣するように依頼されたがこれを断った。結局、松方首相は近衛に貴族院議長就任を勧誘し、近衛は貴族院議長に就任することになっ

---

[11] 坂野潤治『明治憲法体制の確立：富国強兵と民力休養』東京大学出版会、1971年、p.62。

[12] 小林和幸『明治立憲政治と貴族院』吉川弘文館、2002年。

[13] 内藤一成『貴族院と立憲政治』思文閣出版、2005年。

[14] 小林前掲書、第1章「貴族院開設前後の有爵議員の貴族院観」参照。小林はここで議会開設期に発行された『華族同方会報告』の掲載記事から近衛らが藩閥や政党のようにある一部の利益を代弁するものでなく、「皇室の藩屏」として国家全体の利益を考慮することが貴族院の存在意義であり、貴族院は藩閥政府からも政党からも独立した存在であるべきであると考えていたことを明らかにしている。

[15] 自由党との連携関係が崩れた改進党は新たに国民協会と連携し、反政府勢力として対外硬を主張する「硬六派」を形成した。詳しくは、佐々木隆『藩閥政府と立憲政治』吉川弘文館、1992年、p.347を参照。

たのである。

第2次松方内閣および与党進歩党と貴族院の三曜会・懇話会との関係はこの時期、極めて良好であったのであり、そのような関係を背景として奥村兄妹は大隈重信にはたらきかけをおこなったのだ。

『朝鮮国布教日誌』によれば、円心が直接政府にはたらきかけたのは1897年6月であった[16]。18日に農商務省、19日には外務省を訪問し、25日「外務省官舎ニテ大隈大臣ニ面謁」して大隈から「朝鮮ニ行クトノ事、国ノ為、法ノ為尽力セヨ」との激励を受けている。

その後、円心は朝鮮に滞在しながらより具体的な場所とプランを策定する。

場所の選定については、近衛からの指示もあり、円心も当初、木浦付近での活動を考えていたようである。釜山に着いた円心は8月2日、開港前の木浦に視察に赴き、伊集院彦吉・釜山港駐在一等領事の賛成を得て木浦付近に居を構えた。ここに20日間滞在したが、現地の人々に受け入れられなかったため、さらに内陸へと移動し、9月23日に光州にいたったという事情があったようだ[17]。

光州で活動をはじめるにあたって、決め手となったのは観察使の尹雄烈（ユンウンニョル）の協力であった。『明治三十一年　韓国布教日記』に書写されている円心から大谷派に宛てた1898年1月14日付の書状には

> 予テ度々上申候通リ、観察使尹雄烈氏ヨリハ是□不一方万□尽力且保護ヲ蒙リ、実ニ感謝□□□儀ニ御座候。既ニ京城加藤〔増雄〕弁理公使ニテハ書状ヲ以テ感謝シ、且後来一層ノ尽力保護ヲ依頼シ来リ、木

---

16 奥村前掲「朝鮮国布教日誌」、pp.494-495。

17『韓国布教日記』1898年12月8日に「韓国内地布教」と題する光州布教にいたるまでの経緯を回想した円心の報告書（岩下が代筆）がある。『朝鮮開教五十年誌』p.68も参照。

浦領事久水三郎氏モ其礼ヲ述ベル為、来月頃当地ヘ出張スル旨申来候。

（□は判読不能。以下同じ。なお、『韓国布教日記』引用文の句読点はすべて引用者による。）

と書かれている。奥村円心の光州での活動は尹雄烈の協力なしには考えられなかったことがうかがえる。

尹雄烈はもと別技軍[18]の長であり、壬午軍乱の際、東本願寺元山別院の石川了因輪番（輪番は別院の責任者）にかくまわれて日本亡命をはかったという過去があり[19]、円心らとも交遊があった。このような経歴から、彼らの活動に積極的に協力したと考えられる。

こうして活動の場を光州に定めた円心は、以下のような布教のプランを策定し、大谷派に提出するにいたる。

第一　殖産興業ヲ奨励シ、可成物質的ノ開発ヲ勉ムル事。

例ヘハ農業改良ヲ図リ、養蚕ヲ奨励シ、以テ輸出品ヲ増サシメ、当地方産出ノ小麦ヲ利用シテ、一般ノ嗜好スル素麺ノ製造ヲ教フル等ナリ。尚又、付近各地産出ノ製紙輸出ノ途ヲ発見スル事。

第二　不問僧俗、地方著名ノ人物ヲ励奨（ママ）シテ日本ヲ観セシメ、以テ一般ノ開発普及ヲ図ル事。

来遊者ハ年ニ必ス二名ヲ下ル可ラス。而シテ又、内地ニ布教ニ尽力スルモノハ不問僧俗、特別ノ取扱ヲナス様、商船会社ヘ向テ総務殿ヨリ照会ノ事。

第三　学校ヲ設立シテ、以テ青年ノ啓発スル事。

---

[18] 1881年に創設された朝鮮最初の洋式の軍隊で、旧式軍隊より優遇された。教官に日本陸軍の堀本礼造少尉を迎え、創設や訓練に日本がかかわった。旧式軍隊の不満をきっかけとして発生した壬午軍乱で、堀本少尉は殺害された。軍乱ののち廃止。

[19]「石川輪番と尹雄烈」（『五十年誌』pp.146〜148）。

最初、彼レラノ恠ミヲ受ケザル様、韓人教師一名ヲ雇ヒ、而シテ生徒ハ総テ無月謝トシ、尚常用紙筆墨ヲ給与シ、初メハ専ラ在来ノ学芸ヲ修セシメ、自然算術地理歴史等及ホシ、終ニ宗教的ノ倫理ヲ教育スル事。而シテ又、生徒ハ凡十名位ヲ限リトシ、観察使地方官等ニ交渉シ、可成中以上ノ生活ヲナシ、且俊秀ナルヲ抜擢スル事[20]。

まず第一に産業振興、第二に朝鮮人に日本を見せる、第三に学校設立、という内容である。

このような努力により、のちに外務省から匿名で大谷派に寄付をした資金を大谷派が布教費として奥村兄妹に支給するという方法で、外務省の機密費を支出させることになった[21]。この直後の1898年1月23日、円心のもとに京都から、補助金下附と実業学校設立が決定したとの知らせが届いた。これを聞いた円心は「歓極」まっていたという[22]。

以上見たように、奥村兄妹の光州での活動は二条および近衛ら貴族院の三曜会・懇話会系の人々、さらに進歩党の大隈といった人々との人脈を背景として実現した。また、全羅南道の尹雄烈観察使は大谷派に縁があって円心とも旧知の仲であり、彼の協力が現地での活動に大きな力となったのである。

2-2. 円心による真宗布教と朝鮮人の反応

次に、円心が光州においてどのような布教をしていたのか、『明治三十一年　韓国布教日記』と『金蘭集』を中心にみていきたいと思う。

---

20 岩下徳蔵記『明治三十一年度韓国布教日記』1898年1月14日。

21 稲葉「光州実業学校について」p.116では「大隈が五百子の光州実業学校に対して外務省機密費を交付したのは、明治31年6月30日、板垣退助とともに内閣（いわゆる「隈板内閣」）を組織し、首相と外相を兼ねていた頃のことである」としている。

22『韓国布教日記』1898年1月23日。

『五十年誌』によると尹雄烈が「警官に命じて奥村師〔円心―引用者注〕の為に寓居をもとめしめ、幸にも西門外崖錫哲（エ ソクチョル）の家（敷地一千坪）を金百円」で円心が購入したという[23]。この建物を拠点として布教活動を開始した円心は1898年1月、本山に提出した上申書のなかで、次のようにいっている。

> 応接所ヲ以テ仮仏殿トシ、釜山ヨリ奉供セシ御画像ヲ崇敬仕候。常ニ出入ノモノハ勿論、日々来遊ノモノモ必ス光仏前焼香称名シ、而シテ後挨拶法話ニ入ル□□ト致候処、一般ノ感情甚タ宜敷、当国風習ニテ婦人ハ他家男子ノ室ニ入ラス、殊ニ外国人ハ最モ忌憚スル処、然ルニ近来ハ右婦人等モ□々来拝シ、談シテ忌憚ナク室内ニ出入仕候[24]。

このように、円心は朝鮮人に布教するにあたって、建物の応接所を仮の仏殿とし、絵像を掛けてこれに礼拝・焼香、称名念仏させたうえで、説教をする、という順序をふませようとした。そうしたところ地元民の好感情を得て、他家の男性、とりわけ外国人男性と同室になることをタブー視する現地の風習にもかかわらず最近は女性たちも出入りするようになった、と報告している。実際、『韓国布教日記』をみると、女性が連れだって度々この布教所を訪問して、仏前で上記のような手順をふんだうえで円心の説教を聴聞したことが記録されている。このように女性が次々と来訪する記録は釜山や元山での布教を記録した『朝鮮国布教日誌』にはみられないものであり、光州布教の特徴の一つである。その契機について『中外日報』

---

[23]『五十年誌』p.68。なお、韓国側の公文書には奥村兄妹の光州での住居は「崔君益の家」と書かれている。1898年8月20日付外部大臣・農商工部大臣李道宰宛て全羅南道観察使閔泳喆の質稟書、『全羅南北来案』、ソウル大学校奎章閣蔵（奎17982-1）。「崖」という姓は韓国にはないので、おそらく「崔」の誤りではないだろうか。ただ、「錫哲」と「君益」との関係（同一人物あるいは親族なのか、など）は不明である。

[24]『韓国布教日記』1898年1月14日付に書写された「北條氏ヘ托スルノ上申書」。

には「長官尹雄烈氏は其母堂をして十五名許の婦人を伴ひ参詣せしめられしにより頓に婦人教誨の道は開け」たとし、「今日にては寧ろ婦人の方に信者多しと云ふ」と書かれている[25]。

さらに、より多くの朝鮮人を集めることを期待して導入されたのが「宮殿（くうでん）」であった。この上申書には「到着ノ宮殿等ヲ整置シ、本尊ヲ奉迦シテ、以テ崇敬スルニ至ラハ又必格別ノ儀ト存候」[26]とある。宮殿とは仏像を安置する屋根と柱で構成される仏具で、朝鮮の寺院には見られない日本独特のものである。『韓国布教日記』1月13日には「午後四時過、本山ヨリ送附ノ仏殿〔＝宮殿―引用者注〕及□□其他到着」とあり、翌14日には「早朝ヨリ仏殿ノ組立ニ掛リ、黄昏漸ク成就ス」とある。宮殿を整えて本尊を安置すれば人々を惹きつけて「又必格別ノ儀」であるだろうと円心は考えたのである。

実際、朝鮮人が宮殿を見物にやって来ているのが『韓国布教日記』にもみえる。たとえば、1月26日には「妓生及男□夜来テ、宮殿拝観シ去ル」とあり、同28日には「婦人六七人来拝、例宮殿ヲ観テ帰ル」といったような記述である。2月2日にはこのことについて触れた大谷勝縁宛上申書を提出している。これによると、1月25日から「来拝ノ男女俄ニ増加シ」ていて、なかでも女性の参拝者が特に多く賽銭を奉納する者もあるという。そして、参拝者たちは宮殿を観て驚き、称賛して評判になっているとしている。だが、これらの人たちは「皆本尊ヲ崇敬セザルヲ以テ遺憾」だとも述べている[27]。宮殿をつうじた布教は、人を集めることには成功したようであるが、所詮宮殿の見物客に過ぎず、円心は半月ほどでその限界を思い知ったのであった。

---

[25]「朝鮮教信」、『中外日報』1898年4月29日。
[26] 前掲「北條氏へ托スルノ上申書」。
[27]『韓国布教日記』1898年2月2日。

一方、僧俗の識字者層の朝鮮人たちは、来訪者ノートである『金蘭集』に円心と対話した感想を残している。そのいくつかを検討してみたい。

図2　『金蘭集』（高徳寺蔵）

明治維新以降の真宗教団においては、近代天皇制国家成立にあわせて「真俗二諦（しんぞくにたい）」が真宗教義の中核にすえられた。真宗の教えに生きるものは阿弥陀仏の救済にあずかる（真諦）とともに、世俗道徳としての「忠孝」を大切にするものである（俗諦）とする教義である。この教義は釜山での布教につづき、光州でも説かれた。円心もみずから手記において、光州で「韓人を接待して真俗二諦の宗義を説」いたといっている[28]。これは、『金蘭集』における多くの来訪者の記述に「忠」や「孝」あるいは「国恩」といった文字が見られることからも確認することができる。真俗二諦の教えは儒教国である韓国で積極的に受け容れられるであろうから、これによって両班層を中心に真宗も受け容れられるのではないか、と考えたのであろう。

しかしながら、真俗二諦を強調する布教に対して、『金蘭集』に感想を書

[28]『五十年誌』p.70。

き残した朝鮮人たちの中には、このような円心たちの思惑とは少々異なる反応を示している者が少なくない。たとえば、崔晋学（チェジンハク）という人物が「儒教と仏教の教えは相通じるものであるのだ。儒教の仁愛と仏教の慈悲はともに人々を救済するもので、その想いには邪念がない」[29]あるいは、鄭南鉉（チョンナムヒョン）が「天地の道理は本来一つであり、儒教と仏教とは互いに通じ合うものであって」[30]というように、「儒」と「釈」＝仏教を同じようなことがらを説くものとして理解しているのである。

近代天皇制国家に対して真宗の存在意義を示すため、強調されたのが「真俗二諦」の教義であった。すなわち、この教義によって天皇制国家への「忠」を説くことで、真宗教団の存在意義をアピールするものであり、その主な対象は儒教の教義に精通しているわけではない日本の一般の真宗門徒であった。

したがって、元々儒教を学んできた人々にこれを説く時、儒教の教典にほとんど触れたことのない日本の一般門徒たちとは異なった前述のような反応がかえってきたのである。引用した『金蘭集』の記述にみられるように、真宗が儒教と同様の「忠」や「孝」を説くものであるならば、真宗に親近感は感じたとしても、これまでの儒教を捨ててまで真宗に帰依する必要がないとも考えられ、ここに大韓帝国やその皇帝に対する「忠」を説く、真俗二諦論を中心とした布教の困難さを見出すことができる。

しかし、光州布教の方針において、このような俗諦を強調する布教は欠くべからざるものであった。1897年6月22日、新たな朝鮮布教の必要性を訴えるべく、近衛篤麿は円心のはたらきかけにより大谷派法主の大谷光演に書簡を送ったが、そのなかで次のように述べている。

29「儒釈典、相通仁愛慈悲、共済蒙、万念無邪。」

30「天地元来一理、通双合儒釈」

近来は西洋の諸国頻りに東洋の事に注意致候様に相成今日にして百年の計をなさゞれば遂に挽回致し難きに至るかと被存候、就ては東邦の先進国たる我国の如き率先して他を誘導致候事必要と被存候のみならず近来兎角清韓両国我国に対し面白からぬ感情を和らげ東邦諸国唇歯輔車の交を為すに至らしむる事は独り当局者の尽力のみにては六ヶ敷如斯場合には宗教と教育の力を借り候事最も必要に有之候事と被存候[31]

近衛は日本が清韓両国を「誘導」して西洋諸国に対抗するとともに、その前提として三国の交流を強化するために当局者のみの努力の限界を「宗教と教育の力」で埋めなくてはならず、そのためにも円心による朝鮮布教が必要であると考えていたのである。つまり、近衛のアジア主義的構想実現の手段としての布教であった。

以上のような近衛の考えは、円心にも共有されていた。1898年12月8日付で岩下徳蔵が代筆して発信した円心による大谷派文書課宛の報告書「韓国内地布教」の冒頭には次のように述べられている。

国ト法トハ皮ト毛ノ如ク、日ト韓トハ唇ト歯ノ如シ。両々相待ツテ完全具備ス。熟慮ルニ東洋ノ形勢月ニ益々非ニシテ、今ヤ韓国ノ状態云フニ忍ビザラントス。此秋ニ際シテ、我王法為本忠君愛国ノ教ヲ以テ彼国民ヲ誘導啓発スルハ、実ニ我教ノ本旨ニシテ、国ニ報ヒ法ヲ護ル所以ナリ。況ンヤ我国ノ文物風教今日ノ盛ヲ来スモノ、往昔彼国ノ誘導開発ニ依ルニ於テヲヤ。於是韓国布教ノ議起ル[32]。

---

[31]『五十年誌』pp.65-66。

[32]『韓国布教日記』1898年12月8日。『五十年誌』p.75では10月の報告書とされているが、代筆者である岩下自身による『日記』の記録には日付もあり、12月8日の日記に書写されていることから、『五十年誌』の記述は誤りであろう。

このように、日本の情勢に影響を与えるにもかかわらず、「云フニ忍ビザラン」状態にあると円心が考える韓国に対して「我王法為本忠君愛国ノ教ヲ以テ、彼国民ヲ誘導啓発スル」ことを目的とし、それが日本という「国ニ報ヒ」ることにつながる、というのが円心の光州布教のスタンスであった。言い換えれば、円心の光州布教はみずからの「東洋ノ形勢」に対する認識にもとづく日本のための布教、「誘導開発」であり、そのため韓国の人々に「我王法為本忠君愛国ノ教」（俗諦）を説く必要があったのである。そして、僧侶である円心においては、このような手段としての布教がそのまま「法（＝仏教）ヲ護ル」ことにもつながると考えていた。

実際、光州で円心は比較的早い時期から東アジア情勢について朝鮮人に語っていた。たとえば1898年1月17日に訪れた青年たちに「近日報スル所ノ東洋ノ形勢ヲ説」いたという。だが青年たちは「平然一人傾聴奮慨スルモノナシ」だったようで、円心らはこのような態度を「無気力」とし「亡国ノ兆顕然」だと考えた[33]。

また、円心は「訪韓以来士気開発ヲ計」ろうとして「日々来往スル幾十人江ハ富国強兵ヲ説キ、其少シク気概アルカ如キハ、更ニ返訪シテ相往来シ」てきたという。だが、結果は思うようにならなかったようで、すでに1898年1月下旬の段階で「当国当政府ノ下ニテ忠臣義ヲ求ムハ到底」無理であるという結論に至っている。その上で朝鮮人は「利益ノ方ヨリ説ケハ、何人モ傾聴」するので、「実業学校ノ如キハ尤モ適切」であるとし、朝鮮人を「後来ノ同胞ト心得」て実業学校設立をすすめるべきだとしている[34]。つまり、円心は朝鮮人の「忠臣義」を喚起して日本の「誘導」によって大韓帝国の富国強兵を実現するという方法に限界を感じていたのだ。そして、それよりも、生活に密着した利益を説きつつ実業学校で「後来ノ同胞」た

---

[33]『韓国布教日記』1898年1月17日。

[34]同、1898年1月24日。

る朝鮮人を教育するのが最も適した方法であると考えるようになったのである。

なお、この年の4月には東本願寺で大法要[35]がおこなわれていて、円心は近隣住民の崔世八（チェセパル）と崔翰鎮（チェハンジン）[36]を連れてこの法要に参拝していた。『五十年誌』はこれについて次のように記している。

> 直ちに本山へ両氏が参拝の為に入京の旨を上申すると本山に於ても海外の珍客であるから特遇丁重を極めた。法会に参列も許可せられ、参拝の余暇には京都の各方面を視察した。［中略］滞在中両氏に関する一切の費用及旅費はすべて本山が負担した[37]。

彼らは布教師とともに初めて本山に参拝した朝鮮人信徒であろうと『五十年誌』はいっている。上の記述からは大谷派が円心の連れてきた二人の朝鮮人に対して非常に丁寧に対応したことがうかがえる。『五十年誌』には両名が光州に戻ってから「僧俗老幼を問はず、日本の文明と本願寺の盛大なることを宣伝した」[38]と誇らしげに書かれている。崔翰鎮は円心の布教拠点の隣接地の所有者で、円心や五百子にとっては学校用地・建物取得にあたっての交渉相手でもあり[39]、京都での丁寧な対応は彼らに対する一種

35『五十年誌』p.73では東本願寺12代教如の「記念大法要」となっているが、この時期、1898年4月18日から25日に東本願寺で行われていたのは本願寺8代蓮如の400回忌法要である。教学研究所編『近代大谷派年表　第二版』真宗大谷派宗務所出版部、1977年、p.88。『韓国布教日記』によると、円心らは4月12日に光州を出発し、5月10日夕方に光州に戻っている。

36『五十年誌』には「崔幹鎮」となっているが、『韓国布教日記』には「崔翰鎮」との記述が多く、時として「崔幹鎮」とも書かれている。「幹」は「翰」の略字ではないかと考えられる。

37『五十年誌』p.74。

38 同、p.74。

39 詳しくは次章参照。

の接待行為であったともいえるだろう。その後、これが功を奏したのか、崔翰鎮は自らの家屋を校舎として提供するなど、積極的な協力者となった。

しかし、同年9月頃から11月まで円心は体調を崩し、さらに翌99年2月には後任の楓玄哲に光州布教を任せ、日本に戻ることになった[40]。

2-3. 光州実業学校の設立と運営

『韓国布教日記』によると、五百子らは1898年4月8日に光州に到着している。ともに来着した人名として「奥村ミツ子　杉江常三郎　田口達平　河原井祐兼　赤星ムラ　磯口スゑ」といった実業学校関係者のほか「法師（＝円心）ノ奥方マサ子」の名もあがっている。奥村ミツ子（光子）は五百子の子で五百子の指示により富岡製糸場で製糸技術を学んだといわれる人物であり、杉江常三郎と田口達平は学校の補助員、河原井祐兼は剣客、赤星ムラは洗濯係、磯口スゑは女中で、これらはすべて実業学校の職員となる人々である[41]。その後、五百子の娘婿で農学校出身の奥村節太郎や教師となる草場亀之助のほか、大工や医師などが実業学校設立のため光州にやって来た。

五百子と節太郎は4月10日に早速農業に適した土地を探しはじめ、尹雄烈のもとも訪問している[42]。以降、5月にかけて学校敷地の確保のため五百子は奔走する。そして、5月12日に用地内にあった竹林の一部を伐採して、いよいよ本格的に学校建築を始める[43]。

---

[40]『五十年誌』p.75。その後、円心は千島でアイヌの人々に対する布教を行っている。後任の楓玄哲はのちに、音羽家の養子となったが、彼が日露戦争のころソウルの鍾路監獄で朝鮮における近代監獄史上初の監獄教誨をおこなったとされる音羽玄哲である。その後、植民地期にかけての朝鮮における監獄教誨の展開については拙論「1920年代植民地朝鮮における監獄教誨」、『近代仏教』16、2009年を参照。

[41]『韓国布教日記』1898年4月8日。

[42] 同、1898年4月10日。

[43] 同、1898年5月12日。『近代大谷派年表』は、この日を光州実業学校設立の日としている。

6月9日には日本から持ち込んだ機械で繭から製糸する試験を行なっているが、使った繭の質があまりよくなかったようで結果は「良好ナラス」だった。だがこれを見た朝鮮人たちは機械の精巧さやスピード、「製糸ノ鮮麗ナルヲ驚嘆シ」たという[44]。このほか、茶と桑の栽培も試みられていた[45]。

このようななか、尹雄烈が更迭されることになった。本格的に学校建設に取りかかった5月12日の『韓国布教日記』に初めてその風説を耳にしたことが記されている。そして、円心と親しかった郵逓司主事の尹爽栄（ユンサンヨン）が6月14日に円心のもとを訪ね、17日に新観察使が光州入りすることを伝えている[46]。

20日には円心が新観察使として就任した閔泳喆（ミンヨンチョル）を訪問し、前観察使のように布教活動への保護を継続してほしい旨伝えると、閔泳喆は、すでにソウルの加藤増雄公使からの指示もあるので「諾承ス」と言ったという[47]。一応、活動への保護を確約させることに成功したのである。

五百子は6月27日付で東京にいる近衛篤麿と小笠原長生に宛てて、この面談の結果を含む光州の現状をまとめた「御報告」を送っている。この書状で五百子は、実業教育の現状について、

> 未だ学校々舎も整備不仕甚困入候得共、教授停止の訳には立至り不申、不得止各家を巡廻して期節相応の教授為到居申候。尚生徒募集の後とても、自費にて教授を受くる等は当国人の怠惰性にては万々出来不申、

44『韓国布教日記』1898年6月9日。

45『近衛日記』1898年7月19日に別紙として付された7月6日付奥村兄妹から近衛篤麿・小笠原長生宛の書状。

46『韓国布教日記』1898年6月14日。なお、ここでは単に「主事」となっており郵逓司主事の肩書きは同月22日の日記にて確認した。円心は大臣の交代など韓国政府中央の情報を光州の郵逓司から得ていたことが『韓国布教日記』のいくつかの記述から確認できる。「尹爽栄」は尹奭栄（ユン・ソクヨン）を誤記した可能性がある。

47 同、1898年6月20日。

何れとも昼食位は当方にて賄ふ事と存候。此件に付予算上課目無御座、為めに甚だ困入申候。何れ本山との協議物に御座候[48]。

と述べている。校舎が未完成の段階でも、校舎建設と並行して巡廻教授がおこなわれていたことがわかる。一方で、生徒を募集しても反応は良くなく、昼食を支給することによって何とか生徒を集めようとしていたようである。

五百子らが生徒募集に苦労していることは日本の超宗派仏教新聞[49]『明教新誌』でも「朝鮮布教の困難」として「彼の大谷派に於ける奥村氏兄妹が光州に於て実業学校を設け間接布教の機関として熱心に土民児童の教養を勉めつつある由なるも目下頗る困難の境に陥り土民等は日々学校に出づるとも今日の生計を助ること能はず糊口の道さへ与へらるれば説教にも参り学校にも入るべしといふ者あるも仲々教養の道を開くこと難く折角の辛労も為に充分其功を奏す能はざるは洵に遺憾なりとさもあるべし大方の諸徳此種の事業を助けて大成せしめよ」[50]と報道されている。宗派を超えて日本の仏教界が五百子らの光州実業学校の試みを、関心をもって見守っていたことがわかる。

つづいて五百子の「御報告」は、

48『韓国布教日記』1898年6月27日、『近衛日記』1898年7月10日。

49 山本彩乃は近代仏教メディアを発行主体や読者層、記事の傾向によって①宗派内メディア②同人誌的メディア③情報総合紙的メディアの3つに分類し、『明教新誌』や『中外日報』を「超宗派の人々によって構成された会社組織によって発行され、啓蒙的性質や政治的思想の傾向が比較的弱く、各教団の総合的な情報によって構成された、総合情報紙的な性質を持つ」③のメディアであるとしている。①や②と比較して、宗派的、思想的偏りが少なく、宗派を超えて仏教界全体に情報を発信するメディアであったといえる（山本彩乃「『中外日報』にあらわれた大谷光瑞―明治三十六（一九〇三）年の大陸関連記事を中心に」p.197、柴田幹夫編『大谷光瑞：「国家の前途」を考える』アジア遊学156、勉誠出版、2012年）。

50『明教新誌』1898年8月20日。

当国人民は到底此侭にて開発とか誘導とか出来不申、［中略］皆此国の亡ぶるは是数なり、運なり、到底目下の国王大臣にては邦基の維持万出来不申とは異口同音の調子にて、［中略］当方に於ても近来は皆々其心得にて、末は必ず我同胞とて日々来訪するものへは日本語を教授し居申候。例の物珍らしき韓人の事故、語を教ゆれば五十音を学ばんと云ひ、五十音を授くれば千字文を習はんとて、頃日は府内大抵オハヨー、ヨロシー位の片語を解せざるもの殆ど無之と申位に御座候[51]。

と、大韓帝国が亡ぶことを前提に、最近は「末は必ず我同胞と」考えて来訪者に日本語を教授しているとしている。円心らは1月末の段階で将来、朝鮮人は「必ず我同胞」となるという結論にいたっていたが、五百子ら実業学校の構成員たちも7月までには同様の考えを持つようになったのである。

7月下旬、五百子は一時帰国した。木浦の久水三郎領事が小村寿太郎外務次官に送った書面には、五百子がどのような用件で東京に出張するのかについて記されている。この文章を見ると、当時の光州実業学校の様子がわかる。ここには「第一　学校経費ノ件、第二　向来方針ノ件、第三　工業教授傭聘ノ件」[52]という3つの用件があげられている。

「第一　学校経費ノ件」というのは学校の運営費を外務省からの補助金と本願寺からの下附金によっているが、「本願寺ハ以前ハ勿論現今ト雖モ出張布教者ニ対シテサヘ経費送達甚タ緩慢ニシテ出張者ノ困難ハ更ニ顧ミサル現状」で、学校経費の調達が困難であるため助けてほしい、という内容である。また「第二　向来方針ノ件」は前述の生徒に対する昼食支給に

51『布教日記』1898年6月27日、『近衛日記』1898年7月10日。このあと、奥村兄妹の活動に対する在木浦日本領事館の久水三郎領事の尽力に、謝礼を述べてほしいと小笠原に訴えている。

52「在光州実業学校長奥村五百子上京ニ付依頼書翰［書写資料］領事久水三郎」、早稲田大学図書館所蔵大隈重信関係資料、http://hdl.handle.net/2065/27422。

関して、その経費を負担してほしい、ということである。「第三　工業教授傭聘ノ件」とは、五百子が農業科に加えて工業科を設置すべく準備しているので、その教員を雇用するにあたっての相談である。外務省の補助を得たといっても比較的早い時期から資金繰りが苦しかったことをうかがわせる内容である。

この時、五百子が7月24日付で久水に提出した「報告書」およびその添付文書「農業ニ関スル報告」「蚕糸報告書」を外務省に加えて提出している[53]。これらの報告によって、1898年7月半ばごろまでの実業学校の状況を垣間見ることができる。

「報告書」には実業学校用地確保の状況について次のように記されている。

> 此間専ラ用地ノ購入ニ勉メ、先ツ予テ内約セシ隣家崔翰鎮ノ家宅及敷地ニ就キ交渉ヲ試ミシニ、種々情実ノ伏スルアリ。為メニ観察使カ自己ノ攻撃ヲ遁レン為メ、専ラ下僚ヲシテ関渉セシムルヨリ、遂ニ外方ノ故障ヲ惹起シ、遂ニ其要領ヲ不得。更ニ又、観察使ノ勧メニヨリ耕作試験用地ヲ名トシテ附近門外ヘ壱町歩許ノ畑地購買ヲ申込ミ、漸々其談判ノ進歩ヲ見シカ、折悪ク観察使転免ノ電報到着セシヲ以テ、例ノ故障ヲ試ムルモノ出テタルヲ以テ、断然其交渉ヲ止ムルヲ得策ト心得、茲ニ教授ノ一点ノミニ注意シ［中略］已ニシテ後任観察使ニ対スル運動ノ必要ヲ認メ、茲ニ上京ノ途ニ上リシカ、幸ニ加藤公使ヲ始メ京城有志ノ尽力周旋ヲ以テ首尾克帰光シ、間モナク六月十七日新観察使赴任セルヲ以テ、今後事業伸張上ニ就テ種々協賛ヲ求ム。第一、柳林藪ニ桑樹植付并ニ無等山ニ茶及桑樹播植ノ件ニ付、口頭ノ賛成ヲ得タルヲ以テ、更ニ此機ニ乗シ茲ニ又家屋狭隘教授上不便ヲ以テ、新ニ

[53] 同史料に添付されている。

寺院ヲ建設シ在来ノ場所ヲ全然学校用ニ供セント欲シ、右建築用地借入ノ要請ヲナシ、元監獄署敷地ノ空地タルヲ以テ之ヲ措定セシモ、後日再設ノ要アリトテ借入ヲ不得。更ニ其言ニ従ヒ、他ノ民地ニ就テ撰択セシニ、恰モ隣居崔翰鎮ハ予テノ内約モアリ、又嘗テ兄円心ニ従ヒ西京ノ行ヲナシ、平生入懇ノ間柄ニシテ、今度家事不如意ヨリシテ其家宅ノ放買ノ意アルヲ聞キ、直ニ前約ヲ履テ茲ニ又再契約ヲ結ヒシニ、文書交換ノ当日ニ至リ突然外部ニ報告シ、之カ訓令ヲ待テ而シテ後処理スヘシトテ又々其決行ヲ不得。然レトモ相互ノ契約ヲ以テ後日決シテ他ヘ放買セサルコトヲ誓約セリ。爾来土地購入ニ就テハ、再三再四失敗ヲ重ネシ［中略］只今後ニ於テ最大不便ヲ感スルハ用地ノ一点ニテ、若シ各国布教者ノ例ニ倣フテ以テ之ヲ処理スルヲ得ハ、其進歩更ニ一段ヲ得ヘシ。［以下、略］

五百子が4月に光州入りして以来、一貫して実業学校の用地確保が重要な課題であったことがわかる。また、前節で触れた崔翰鎮の土地をめぐって約束が二転三転する様子も述べられている。彼が実業学校の用地確保問題においていかに重要な人物であったかがうかがえ、円心が彼を京都に案内し大谷派が丁重にもてなしたことの意義もうかがい知ることができる。さらに、土地取得をめぐって取引の直接の当事者ではない「外方ノ故障」すなわち現地住民たちの反発が起こったことについても述べられているが、これについては土地取得の交渉を一旦諦めることで回避している。観察使交代の際にも「故障」の動きがあったようであるが、これも同様に「断然其交渉ヲ止ムルヲ得策ト心得」て、「教授ノ一点ノミニ注意シ」たという。

このように用地の確保に当初から取り組んできた五百子であったが、さまざまな困難に直面し、3カ月半経過した7月後半において「最大不便ヲ感スルハ、用地ノ一点」だと嘆いている。光州実業学校にとって用地確保問題は重要な課題であるにもかかわらず、「再三再四失敗ヲ重ネ」たために

学校運営の障害となっていたのである。このため、用地の問題を「各国布教者ノ例ニ倣フテ以テ之ヲ処理スル」ことができればさらに成果が期待できるとしている[54]。

次に、「農業ニ関スル報告」では、五百子が光州入りしたこの年の播種の時期に土地の確保が間に合わず、境内地の一部を「二拾余日間総掛ニテ数百担ノ小石ヲ除去シ」て試作地を整地して「種類ハ専ラ蔬菜ニ止メ総テ二十余種」を栽培したところ「大抵好結果ヲ得タ」ことが述べられている。また、土地が肥沃で「肥料ヲ要スルコト少」ないとして、光州が農業に適した土地であることが強調されている。さらに、朝鮮人に対する農業教育の方法については現状では彼らの「農地ヲ巡視シ」ながら「指示教導」しているが、これに対して朝鮮の農民が「質疑ヲ起シ当ニ傾聴セサルノミナラス却テ唾笑スルコトサヘア」ってなかなか従わないので、今後は学校で土地を確保して実際に作物を栽培し、その品質や収穫量を現地農民のものと比較させて「改良ノ急要ヲ感起セシムル」べきだとしている。さらに、水利灌漑施設の不備を指摘し、その整備の必要性を訴えている。そして、「当道ハ当国内ニ於テハ気候尤モ順応ニシテ、且多クノ荒蕪地ヲ有シ、加之土質甚タ膏溲ナルヲ以テ、今若シ法ヲ設ケテ以テ我邦人ノ移住ヲ促シ之カ開発示導ニ当ラシメハ、相互必ス大ニ利スルアルベキナリ」として、新たに日本人移民を促す立法措置がなされれば、光州をはじめとした全羅南道で日本人移民がみずから開墾した土地で農業を営みつつ現地の朝鮮人に対しても農業を指導することで、両国の人々にとって利益になる、と日本政府に入植のための立法を要求している。五百子がこの光州地方を将来の日本人入植地として期待していたことがうかがわれる。

---

54 ここでいう「各国布教者の例」というのは、おそらく欧米のキリスト教系団体による社会事業において、韓国政府承認のもと土地利用が可能であったことを指していると思われる。光州実業学校において、これが具体的にどのようなことを指しているのかについてはさらに詳細な検討が必要であると考えられるため、あらためて別稿で論じたい。

他方の「蚕糸報告書」には、日本から持参した卵から孵化した蚕の幼虫が全滅してしまったことが述べられている[55]。日本内地と光州とで桑の生育時期が異なっていたことによって、孵化した蚕の幼虫のエサとなる桑葉が収穫できなかったので餓死してしまったのである。それに対し光州実業学校がとった対策として、『韓国布教日記』1898年4月24日には「今春ハ韓種蚕ヲ飼育スルコトト決セリ」とある。「蚕糸報告書」によれば、こうして「土地在来ノ蚕種ヲ購ヒ飼育」したところ、飼育方法の工夫の甲斐もあって「飼育結果良成績ヲ得タ」という。そして、その飼育法を近隣の住民に教授して好成績を収めているという。一方で蚕のエサである桑の栽培方法については、光州在来の方法では桑の木を痛めてその寿命を縮めてしまい、収穫量が少なく品質も良くないとして「其ノ放心的処理ヲ講セサル、実ニ歎スルニ堪ヘサルナリ」といっている。そして、この状況を改善するために、日本産の桑樹を運び入れて「桑園ヲ製作セハ、一方ニハ韓民ニ対シ実習的感念ヲ起サシメ、一方ニハ詼業ノ可成的有望ナル事ヲ知ラシムルノ策トナリ、同時ニ技能的日本人ノ行為ヲ感スルノ一媒物ナランカト思ハルルト共ニ信用上ニ非常ナル影響ヲ及ホス導火線タルカト被相考候」といっている。すなわち、ここで示されたプランにおいて実業学校により桑園を造る目的は、日本人が口頭で巡回教授するのではなく、実際に日本の技術によって栽培・収穫する姿を見せることで、桑栽培の事業としての可能性を示すとともに、その技術をつうじて日本人に対する感情を良くするということであった。

このように、五百子らは経済的環境が厳しく学校用地の確保も思うようにならないなかで実業学校として試行錯誤しながらプランを考えていた。

---

[55] 任や橋澤の研究では、在来の蚕を使った挽回については触れられず、この全滅のみが強調され、これがのちの光州での活動の失敗につながったような論が展開されている。任「朝鮮統治と日本の女たち」p.104、橋澤「日本仏教の朝鮮布教をめぐる一考察」p.166。

そして、日本人が実際に日本の技術によって農業・養蚕をおこない、その成果を光州の人々に目に見える形で示すというプランを外務省側に示しつつ、それに向けた取り組みが続けられていたのである。

このほか、光州実業学校に付属して施薬院が設置されていた。1899年の年初、日本に一時帰国していた五百子は『明教新誌』のインタビューに対して次のように語っている。

> 別に施薬院を立てました、俗に本願寺病院といひます、前の片桐夫婦がこゝに居るのです、段々と朝鮮人が懐いて来ます誠に有りがたい事であります[56]

実業学校の医療スタッフとして滞在していた医師・片桐為弥が夫婦で「本願寺病院」と俗称されている施薬院を運営し、実業学校関係者のみならず現地の人々に対しても医療行為を行っていたのである。五百子が「段々と朝鮮人が懐いて来ます」とみずから評価しているように、医療によって朝鮮人を懐柔する役割を果たしていた。これに加え、実業学校での実験や教育が日本の農業や工業に関する技術力を現地の人々に示すものであったのに対し、施設は不十分であるにせよ日本の西洋医療の初歩的な技術力を示すという役割が施薬院に期待されたのではないだろうか。そのため、現地の朝鮮人が施薬院での診療および施薬を無料で受けることもあった[57]。このような医療行為の背景には、当時の日本仏教界が欧米のキリスト教団体による朝鮮での医療活動を意識していたことがあったのではないかと考え

---

[56]『明教新誌』1899年2月4日。

[57] 1903年3月15日付、東本願寺奥村実業学校次長赤塚敬雄「東本願寺奥村実業学校及当地ノ景況」（写）、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081966500（第117画像目）、韓国（朝鮮）ニ於ケル学校関係雑件（補助金支出之件）第二巻（3.10.2）（外務省外交史料館）。

られる[58]。

以上のように、光州実業学校は光州に住む朝鮮人を奥村兄妹が意図する方向に「誘導」するため、日本の「文明」を展示するショールームとしての役割を担わされようとしていた。すなわち、農業などに関する実験や教育、そして五百子による「農業ニ関スル報告」「蚕糸報告書」において示されたビジョンはもちろん施薬院も含めてすべて日本の「文明」を示す技術を日本人が「実演」し展示することを目指していた。それは当時の日本内地の人々、そして今日の私たちが考える「実業学校」のように教員が生徒に口頭で知識を与え、その指示に従って生徒が実習していくことで技能を向上させるという上意下達式の教育機関とは異なる。いうなれば日本の「文明」の見本市やミニ博覧会のような「実業学校」を志向していたのであり、ここで展示された日本の技術力を光州の人々が目の当たりにすることによって日本の「文明」に敬服させつつ彼／彼女らを「誘導」しようとしたのである。

いうまでもなく、この学校は前述の円心が本山に提出した布教プランに沿ったものであった。だが、この実業学校は前に引用した円心の布教プランの第三にあげられた「学校設立」における「学校」とは明らかに性格が異なる。ここでいう「学校」は「可成中以上ノ生活ヲナ」すような支配層出身の選抜された「俊秀ナル」生徒を集め、「自然算術地理歴史等」といった初等普通教育を行いながら最終的には宗教教育も行うという、日本国内の宗門立小学校のようなものを想定したものである。これに対し、光州実業学校は、布教プランの「第一　殖産興業ヲ奨励シ、可成物質的ノ開発ヲ勉ムル事」に対応するものであったと考えられる。すなわち、「殖産興業」

58 このころの『中外日報』は、アメリカから来た長老派医療伝道師・アレン（朝鮮名：安連）を初代院長として1885年ソウルに設立された朝鮮初の西洋医学の病院である王立の済衆院（当初の広恵院から改称、現在の延世大学校付属セブランス病院の前身）について、伝道師でもあった歴代院長の動向を中心に報じている。

を目的とし、養蚕や茶・桑などの農業に関する技術を普及させ、また現地の産品を素麺や紙などといった製品にする方法を教え、これらを輸出品とすることで産業振興をはかりつつ、その傍らで日本語も教授して、支配層ではない朝鮮の一般農民を奥村兄妹の思い描くビジョンに「誘導」しようとする学校であったのである。

一方で、ハード面でも校舎建設が続けられ、ついに9月10日、校舎の上棟式が行なわれた。だが、光州実業学校はその後、さらに校舎建設をすすめながらも学校として大きな成果をあげることなく、最終的にはやがて姿を消すこととなっていった。

3. 失敗の理由に関する通説の再検討

3-1. 朝鮮人の「激しい抵抗」による失敗説

主な先行研究では実業学校が衰退していった最大の理由として朝鮮人の襲撃ないし「激しい抵抗」をあげている。任展慧は「この「日本村」失敗の決定的な原因は朝鮮人の激しい抵抗によるものであった。朝鮮人は「日本村」に毎夜のように押しかけ、投石し」たとし、その性格を「五百子の「日本村」の侵略性を見抜」いた「実力闘争」と定義しつつ、その背景に独立協会や万民共同会の存在があるのではないかと推測して「ソウルでの独立協会の愛国闘争に馳せ参じた朝鮮民衆のエネルギーが地方に影響を及ぼしたひとつの例が、光州での「日本村」糾弾だったのではないだろうか」としている[59]。橋澤裕子は、「一番の、五百子らにとっての困難は、朝鮮

[59] 任前掲書、pp.104-107。先行研究では五百子たち当時の在光州日本人の共同体について「日本村」あるいは「極楽村」というのちに書かれた伝記にしか登場しない表現を用いている。なお、伝記でも五百子の死後まもなくの1908年に愛国婦人会が刊行した大久保高明『奥村五百子詳伝』にはこの表現はなく、大正期以降に伝記などに登場したものと推測される。管見の限り当時の当事者も、あるいはメディアなどでも使っていなかったこの表現は後世の創作である可能性もあるため、本稿ではあえて使わないことにする。

人たちの激しい抵抗であった。こうした抵抗が、五百子の「日本村」失敗をもたらしたのである。朝鮮人は「日本村」へ投石を繰りかえした」とし、その背景として「このころ甲午農民戦争で戦った武装農民集団が、分散活動を行なっており、また、南部朝鮮一帯に活貧党闘争が始まっていた時期である」と説明している[60]。また、諸点淑は「最大の困難は、朝鮮人たちの激しい抵抗であった」とし五百子ら実業学校関係者は「日本軍による光州占領の尖兵であると周囲の朝鮮人からは受け止められ、学校には常時投石があった」としている[61]。

では、これら先行研究のいう朝鮮人の「激しい抵抗」とは具体的に何であるのだろうか。『韓国布教日記』には学校を「失敗」に追い込むほど「毎夜のように」あるいは「常時」投石があったというような記述は確認できない。また、奥村兄妹の朝鮮での活動を報じる仏教新聞『明教新誌』『中外日報』でも、彼らの活動に批判的な記事においてでさえ、そのような内容のものは見当たらない。さらに、当時の韓国の新聞『皇城新聞』『独立新聞』の記事にも、そのような内容は確認できなかった。

上記先行研究の典拠とする史料が『近衛篤麿日記　付属文書』所収の1898年11月19日付五百子による近衛宛書簡の一部である。書簡の原文をみてみよう。なお、先行研究で引用されている部分は傍線で強調しておく。

> 拝啓、時下向寒の節、閣下益々御清栄御座被遊、為邦家奉大慶候。陳れば当実業学校々舎新築に就ては、先般申上候通り過日已に上棟式を挙行仕、一般の人気も大に引立申、一同益々勇奮精励罷在申候処、数日前より西学党蜂起云々の風評有之候処、最早事実は一般に知れ渡り

---

[60] 橋澤前掲書、pp.166-167。

[61] 諸「東アジア植民地における日本宗教の「近代」」p.61。任や橋澤がその後この「抵抗」によってまもなく学校が無くなったかのように論じているのに対し、諸は史料をあげて「一九〇〇年までは運営されていた」としている。

申候。目下集聚の地方は全羅北道にて、古阜、茂長、大仁地方を始めとし、当南道に於ても当地を距る六里許の長城、七里許の霊光等を始めとし、各地一帯に幾分の紛擾相見え申、各郡衙門は元より、当道観察使等も餘程苦慮の様子相見申候。未だ信ず不可るの風説には有之候へ共、今回の暴徒即西学党は、露国の尻押より来り候様の説専ら有之申候。京城近来の政変と申し、旁々符号の点不少、或は事実に近からんと被信申候。此際当府に於ては予て観察使の告布にて、当南道三十二郡の文人詩客を会合し大に詩賦を闘はすの計画有之、目下其期日に当り、昨日より夫々集合仕候者雲霞の如く、不此而已、乗此機て或は種々の悪事を計画せんとて入込候所謂無頼党亦甚夥敷、為めに当府警務署に於ても大に心配仕、種々注意を与へ呉、且又門扉に掲示をなし、及巡検を特派する等、可及的の保護を与へ呉候得共、未だ充分の安心を得不申、依て出張日本警官と合議の上、更に臨時出張二名応援方願出、併せ銃器五挺、弾薬二百発併送願出致候処、今晩正に来着相成一同安堵仕候。昨日よりは昼夜の別なく交代、表裏両門警戒仕、婦女及虚弱者は已に夫々避難せしめ、目下現存者は悉皆決死の者計に有之、只管時期到来相待居申候。

原文では、まず全羅北道内において東学党の残存勢力による「西学党蜂起」の風評があって、全羅南道でも一部に「紛擾」があるようだ、ということが述べられている。このような時期に、光州府では観察使が呼びかけて全羅南道各郡の「文人詩客」を集めて「詩賦を闘は」す企画の期間中にあたっているという。それに続くのが橋澤論文と諸論文で引用されている「昨日より各郡にて夫々集合仕候者雲霞の如く」という文である。両論文ではいかにも学校を襲撃する朝鮮人が「昨日より各郡にて夫々集合」しているかのように引用されているが、原文の文脈では、これは五百子らに抵抗する朝鮮人ではなく、「文人詩客」が「昨日より各郡にて夫々集合」し

ているのである。

その人混みに「所謂無頼党」が紛れ込んで問題を起こすことがないか、心配した現地の警務署が実業学校に対しても警備を強化したが、それでも不安なので「出張日本警官と合議の上、更に臨時出張二名応援方願出、併せ銃器五挺、弾薬二百発併送願出致」た、というのがもともとの意味である。

「婦女及虚弱者は已に夫々避難せしめ、目下現存者は悉皆決死の者計に有之、只管時期到来相待居申候」というように、東学農民勢力による大規模な戦闘から数年しか経過していないこの時期、「西学党蜂起」の風評は五百子をはじめ光州にいた日本人たちに極度の緊張感を抱かせる事態であったことは容易に想像できる。だが、あくまでこの「西学党蜂起」は他の地方・地域でのことであり、光州の五百子たちを襲撃しようとする群衆が現に迫っているというわけでもなく、他地域の群集が光州実業学校を襲撃対象として光州を目指していたわけでもない。風評をうけて、数年前、全羅道一帯で発生したのと同様の事態が光州でも起こることを五百子ら光州在住の実業学校関係者が警戒し、念のために取られた予防的措置が警備と武装の強化、そして「婦女及虚弱者」の避難だったのである。

しかしながら、これらの先行研究では、あたかも学校を襲撃しようとする朝鮮人が実際にすでに「雲霞の如く」集結していて、これに対処するために警備と武装の強化および避難が行なわれたものであるかのように史料の意味を歪曲させて引用しているのである。

『韓国布教日記』の記述を見ても11月18〜19日前後に学校を襲撃しようとする朝鮮人の集団についてはとくに何も述べられておらず、18〜19日の日記には門を閉ざして警備をし、「雑人」の出入りを制限していたことが記されているのみである。その後は学校が混乱状態になったというような記録はない。

3-2. 朝鮮人の「抵抗」の実際

確かに前章3節で述べたように、この出来事とは別に学校用地確保の交渉過程において、これに反発する地元民がいた。だが、これに対して光州実業学校側は早急な土地の確保よりも当面の対立回避の方針をとった。このため、そのような状況は用地確保のための交渉に反発して発生した一時的なものであったようである。そして、交渉を中断して以降「常時投石があった」あるいはそれが「最大の困難」であったという事実は、日記等からは確認できない。1903年3月15日付で当時実業学校次長として現場の責任者であった赤塚敬雄（けいゆう）が木浦の日本領事館に提出した報告書「東本願寺奥村実業学校及当地ノ景況」には設立当初の状況について、次のように記されている。

> 当校設立当時ハ土人ニ誤解セラレ、又在校者モ事情ニ通セス、相互意疏通セザルヨリ、日々闘争アリ、投石者アリテ、一身上危険ノ憂モ少カラザリシガ、民心ノ収攬ニ努メ且ツ施薬等ヲ行ヒシ結果、今日ニ於テハ敢ヘテ防害（ママ）ヲ加ヘザルノミナラス、一般皆好意ヲ表スルニ至レリ[62]。

つまり、現地住民の「誤解」と学校関係者が「事情ニ通」じていなかったことで意思疎通ができなかったため、設立当初において「闘争」「投石」があったが「民心ノ収攬ニ努メ」たのでそのようなことをする者は今日ではいない、とされている。

もちろん、これは光州の人々の声を反映しているというよりも、日本の外務省当局に学校運営が上手くいっていることをアピールするための学校

---

[62] 前掲「東本願寺奥村実業学校及当地ノ景況」（写）、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081966500（第117-118画像目）、韓国（朝鮮）ニ於ケル学校関係雑件（補助金支出之件）第二巻（3.10.2）（外務省外交史料館）。

責任者による報告であるので、「誤解」というのもあくまで実業学校側からの見方であり、現状についても「一般皆好意」というのは誇張された表現であるとも考えられる。

だが、前章3節で引用した、学校設立から数カ月後の1898年7月24日付で久水をつうじて外務省に提出された五百子の「報告書」の土地取得に関する記述と、この1903年の記述を照らし合わせると、ここでいう「日々闘争」「投石」というのは前章でみた土地確保をめぐる交渉過程で発生した「外方ノ故障」あるいは「例の故障」であると考えられる。

すなわち、最初期に学校用地の契約をめぐって実際に「外方ノ故障ヲ惹起シ」て土地確保を断念したことがあり、次に観察使交代の電報が入った1898年5月中旬以降に再び「例ノ故障ヲ試ムルモノ出テタ」が学校側によって交渉が中止され、「教授ノ一点ノミニ」専念することとしたので、「故障」は回避されたのである。つまり、この「報告書」は7月後半に書かれているのであるから、遅くとも五百子らの光州入りから3カ月後の1898年7月頃までには2度目の「故障」の企図も含めて、この事態は収拾がついていたということになる。

次に、『韓国布教日記』によって「外方ノ故障ヲ惹起シ」た時期とその経緯についてより詳細に確認してみたい。

この「故障」のことが具体的に書かれているのが、1898年4月26日の日記である。これによると、崔翰鎮は昨春、つまり1897年春に500両で住宅を購入したが、その後必要な瓦屋一軒をのこして他の部分は100両を返金してもらい、もとの所有者に返すという約束をした。ところが、未だに入金がないという。そのような時に崔翰鎮の長男・泳洙（ヨンス）が重病に罹ってしまい、「蕩尽見ルニ忍ヒ」ない状態だったので、円心が「崔世八ト計リ其家宅ノ一部ヲ百五十両ニテ買取リ以テ彼家政ヲ」救おうとしたので、崔翰鎮も感謝してすぐにその売買の約束をしたという。ところがこのあと、この取引をめぐって五百子がいう「外方ノ故障」が起こるのである。『韓国布

教日記』の記述をみてみよう。

> 其約定取極メシニ、老師〔＝円心〕ニ随行シテ〔崔翰鎮が〕日本ニ赴クヤ、村内不良ノ党種々計策ヲ至シ、彼家カラ放逐セント計リ□テハ、当方ニ迄悪感□ヲ収ント□□セシヲ以テ、観察府ニ具申シテ、以テ彼家ヲ安セント欲シ、斯昨日ヨリ度々衙門ヲ訪レシモ、申聞故障ノ為メ其意ヲ□サザリシ。黄昏ニ至リ彼党又少シク省□セシト見ヘ、遂ニ泳洙等ハ其侭居住スルコトトナリ、茲ニ数□来紛擾ノ一件落着シ、彼不良共モ我真意ヲ伝達セシメシ…[63]

すなわち、円心と崔翰鎮らが東本願寺参拝などのため光州を離れた時期に「村内不良ノ党」が崔翰鎮から譲り受けようとした家屋から実業学校関係者を追い出そうとしたのである。これに対し、実業学校側は何度も観察府を訪れて助けを求めたが聞き入れられず、結局、そのまま崔泳洙らが居住し続けるということで決着した、というのである。

円心たちが光州を出発したのは『韓国布教日記』によると4月12日であった。そして、その後に上記のような「故障」が起こり、これが4月26日に「一件落着」したのである。つまり、五百子ら実業学校関係者らが光州入りして間もなく、円心不在時の4月12日から26日のあいだで数日から最大でも2週間の期間に起こった「紛擾」が五百子が「報告書」でいう「外方ノ故障」であった。

続いて、5月の観察使交代時期における「故障」に関する『韓国布教日記』の記述を見てみよう。『日記』によると、光州で観察使交代の「風説」を学校関係者が確認したのは5月12日のことであった。同時にこの日、学校に向けて現地の人々が投石したことが書かれている。日記には次のように

63『韓国布教日記』1898年4月26日。

記されている。

> 此日市日ニテ、各種買物ヲナセリ。市場帰途ノ韓人来□甚タ多ク、門ヨリ□漢侵入シ、終ニハ門外ヨリ小石ヲ投スル等、非常ノ混雑ヲ来セシヲ以テ、不得止一応警務署ヘ知之セリ。

このように混乱は発生したのであるが、続いて書かれている文章は円心が10日に京都から戻ったので、土産をもって世話になっている現地の官吏らの自宅を挨拶に回ったという内容である。「不得止一応警務署ヘ知之セリ」という対応と、先行研究で言われてきたような銃と弾薬によってみずから武装しての警備とではあまりにもかけ離れている。五百子の「報告書」の記述からもうかがえるように、4月の「故障」と比較すると「例ノ故障ヲ試ミ」たという程度で、学校による土地取得に反発する現地の朝鮮人がいたことを物語る出来事ではあるが、これをもって学校の存続にかかわるようなもの、あるいは「最大の困難」と呼べるようなものではないだろう。

これ以降は五百子がいうように強引な土地取得よりも実業教育に力を入れたので、五百子らに反感をもつ現地の人々の存在はあった[64]にせよ、残された一次資料をみるかぎり、設立当初のこれら二つの「故障」のような規模の事態は発生していないようである。

先行研究で典拠とされている小野賢一郎の伝記などでは、この「故障」を脚色して五百子の受難物語に仕立てている。その物語を「侵略性を見抜」いた「朝鮮人の抵抗」と再解釈したうえで、五百子の当該書簡をこの伝記の内容を記録した史料と思い込んで読もうとした結果、上記のような恣意

---

[64] たとえば、学校の職員を日本の偵察員だとして非難する現地の朝鮮人もいたという。機密第5号付属「光州実業学校情況」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081966500（第43-44画像目）、韓国（朝鮮）ニ於ケル学校関係雑件（補助金支出之件）第二巻（3.10.2）（外務省外交史料館）。

的な史料引用に陥ってしまったのではないだろうか。

以上のことから、「実力闘争」としての「激しい抵抗」が学校閉鎖の直接の原因ではなかった、といえよう。

4. まとめに代えて

これまでみたように、奥村兄妹は光州における活動を通じて、当初、近衛篤麿のいうようなアジア主義的な立場から大韓帝国の富国強兵をめざして、ほどなく大韓帝国の滅亡を前提として、朝鮮人を「誘導」しようとした。朝鮮人は奥村兄妹の描く東アジア像を実現する手段であり、さらに朝鮮人を手段化するための「教育と宗教の力」であったのである。したがって、大韓帝国期に光州においておこなわれた奥村兄妹による真宗布教と実業学校設立は教育や宗教そのものを目的としたものではなかったといえるだろう。

従来の研究ではこのような活動が、朝鮮人によって「常時投石」があったために撤退を余儀なくされ、失敗に追い込まれたとされてきた。しかし、本稿で『韓国布教日記』や公文書など新史料を含む一次資料をもとにこの通説を再検討した結果、妥当ではないことが明らかになった。

その後の実業学校は、1899年になって病気で日本に戻ったままとなった五百子に代わって、浅井安次郎（陸軍予備役少尉）が運営を任されることとなり、1899年11月9日には学校施設の落成式を行なっている。五百子が事実上運営から撤退[65]して以降も、長岡外史ら陸軍関係者が運営にかかわっ

[65] 大谷派は当初、一度だけ資金を提供して以来、運営でも資金面でもほとんどかかわっていなかった。五百子は帰国後、土地取得をめぐって1900年に韓国政府と直接交渉するためソウルを訪問したが、かなわず、それ以降は学校とはかかわりが無くなった、という。1902年7月31日付在木浦日本領事館附巡査柳田房吉による在木浦日本領事若松兎三郎宛「復命書」には「奥村五百子カ校長ナリト云フハ名義ノミニシテ同女史カ今日ニ於テ本校ニ何等ノ関

た」のではなく、日露戦争の頃まで継続している。これといった成果があがらないにもかかわらず、である[66]。

だが、こうして存続させられた光州実業学校も、結局、日露戦争後にいたって歴史から姿を消すこととなった[67]。

ではなぜ、光州布教や光州実業学校が成果をあげず、学校が最終的に姿を消すことになったのであろうか。その問いを説くヒントは五百子らによる土地開発の企図とそれに対する光州の民衆、そして大韓帝国当局の対応のなかに隠されている、と考えてすでに研究をすすめてきている。

だが、これについては与えられた紙幅を超えてしまうので、近い将来に別稿で論じたい。

係ヲ有セサルハ言フ迄モナキコトナルガ」とある。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081966500（第100画像目）、韓国（朝鮮）ニ於ケル学校関係雑件（補助金支出之件）第二巻（3.10.2）（外務省外交史料館）。同年8月4日付在木浦日本領事若松兎三郎から外務大臣小村寿太郎宛機密第15号「在光州奥村実業学校近況報告ノ件」には五百子が開墾許可の失敗後は「光州ヲ去ツテ本邦ニ帰リ久ク渡韓」していないとしている。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081966500（第85-86画像目）、韓国（朝鮮）ニ於ケル学校関係雑件（補助金支出之件）第二巻（3.10.2）（外務省外交史料館）。ただし、名義上は一貫して五百子が校長、東本願寺の大谷光演が副総裁（総裁は近衛篤麿）であった。これは日本側にとって表向きは日本政府や日本軍の事業としてではなく、宗教団体による社会事業としておいたほうが韓国側の理解を得るうえで有利であったからだと考えられる。

66 光州実業学校に対する外務省からの補助金は1903年度まで継続した。1904年4月1日付、在木浦領事若松兎三郎から外務大臣男爵小村寿太郎宛、機密第13号「光州実業学校ニ関スル件」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081966500（第139-140画像目）、韓国（朝鮮）ニ於ケル学校関係雑件（補助金支出之件）第二巻（3.10.2）（外務省外交史料館）。

67 稲葉「光州実業学校について」によれば、光州実業学校は統監府設置以降、史料から姿を消している。だが、諸は「韓国併合以後にも光州実業学校は存続する」としている。諸前掲論文、p.63。しかしながら、その部分の注釈にあげられた典拠（『五十年誌』）をみてもそのような記述はない。事実であれば重要な問題なので、あらためて根拠を示すべきであろう。